

早稲田大学環境総合研究センター(WERI)

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

第14回ふくしま学(楽)会・第2回1F再生塾

ふくしまから伝えたいこと、
知らなければいけないこと。

報告書



日時: 2024年7月28日 13:00-18:00
会場: ふたば未来学園中学校・高等学校(福島県広野町)+Zoomミーティング
主催: 早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター
早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI)
共催: 福島県広野町、富岡町、ふたば未来学園中学校・高等学校
後援: 福島イノベーション・コースト構想推進機構、双葉地方町村会
早稲田大学アジア太平洋研究センター(WIAPS)
早稲田大学環境総合研究センター(WERI)

2024年10月25日

【参加者数:91 人】

＜プログラム＞

13:00-13:10:開会にあたって

松岡俊二（福島再生塾・塾頭、
早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター・センター長）

13:10-13:30:開会挨拶

遠藤 智（福島県広野町・町長）

山本育男（福島県富岡町・町長）

郡司 完（福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校・校長）

中嶋聖雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・研究科長、早稲田大学アジア太平洋研究センター・所長）

小野田弘士（早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・研究科長、早稲田大学環境総合研究センター・所長）



テーマ:福島から世界の未来を拓く人材育成を考える:

世代を“越えた”「学びの場」の創出: 境界を「越える学校」から「みんなの学校」へ

総合司会: 小磯匡大 (1F 地域塾・副塾頭、ふたば未来学園・教諭)

鈴木貴人 (福島再生塾・運営委員、ふたば未来学園・教諭)

13:30-14:00: 話題提供

1. 福島浜通りにおける人材育成について

森口祐一（1F 地域塾・副塾頭、国立環境研究所・理事）

2. 福島復興と人材育成を支援する基金創設について

崎田裕子（福島再生塾・運営委員、1F 地域塾・副塾頭、環境ジャーナリスト）



（報告内容については、報告資料を参照ください）

14:00-15:10: 座談会

司会：小磯匡大・鈴木貴人

安東量子（福島ダイアログ・理事長）

菅波香織（1F 地域塾・運営委員、未来会議・事務局長、弁護士）

遠藤秀文（福島再生塾・副塾頭、株式会社ふたば・社長）

山根辰洋（福島再生塾・副塾頭、F-ATRAs 代表理事、双葉町議会議員）

長谷川翔哉（福島県立ふたば未来学園・高校 2 年）

野村京平（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・修士 1 年）

森口祐一（1F 地域塾・副塾頭、国立環境研究所・理事）

崎田裕子（福島再生塾・運営委員、1F 地域塾・副塾頭、環境ジャーナリスト）



（休憩：15:10-15:20）

15:20-16:30: 少人数グループによる「対話の場」（会場参加者のみ）

（休憩：16:30-16:40）

16:40-17:50:全体会

司会：穂積香奈（福島再生塾・副塾頭、株式会社ふたば・主任）



17:50-18:00:閉会挨拶

松岡俊二（福島再生塾・塾頭、1F 地域塾・塾頭、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授）

【座談会】

司会：小磯匡大（1F 地域塾・副塾頭、ふたば未来学園・教諭）

鈴木貴人（福島再生塾・運営委員、ふたば未来学園・教諭）

長谷川：今、高校2年生で、進路を考える時期だが、原子力分野に興味がある。しかし、大学の紹介だけでは、どこが原子力を扱っているかが分かりにくく、大学選びが難しい。福島県浜通りで人材育成を進めるなら、原子力分野にもっと力を入れてほしいと感じている。

野村：学部では理工学部で土木や環境などの工学分野を学び、修士課程では計量経済学に進んだ。理系から文系に替えたという背景を持っている。人材育成に関していうと、高校時代は理系のクラスに属していたが、科目を考えると理科が特に得意というわけではなく、むしろ地理や歴史も好きだったし、数学も好きだったため、進路に迷ったことがある。高校や中学で理系と文系をはっきりと分けることに違和感を感じていた。今では、どちらの知識も必要だと感じており、理系も文系も学べる環境が早い段階から整っていることが重要だと思う。義務教育から高校、大学、さらに大人になってからのリスキリングに至るまで、こうした考えを生かせる環境が整えられると良いと考えている。

菅波：私は大学で工学を学んだ後、法律に転じ、文系でも理系でもない立場にいる。人材育成という言葉には、常に違和感を感じている。材料の「材」や財産の「財」のように、子供や若者を客体として扱いすぎていると感じている。子供基本法が成立し、子供たちの意見や参画が重視されるようになっているが、私たち大人が子供を主体としてみる事ができていないのではないかという問題意識を持っている。

昨日、福島県いわき市で子供たちと意見表明について話し合う場を設けたが、子供たちは「夏休みの

宿題はいらない」という意見を持っており、宿題の目的について議論した。このような対話の重要性は、廃炉のテーマにも通じるもので、私たち大人が当然だと考えていることに対して、子供たちが「本当にそれは当たり前なのか」と問いかけることが、再考するきっかけになるのではないかと感じている。多世代、多年代、理系や文系を問わず、多様な考えや立場が交じり合うことこそが豊かさを生むのだと思っている。

また、福島県浜通り地域では、多重債務を抱えた家庭や母子世帯が支援を求めて移住してくるケースが多く、ふたば未来学園に入れられない場合、選択肢が少なくなるという課題がある。多世代が共に暮らし続けるためには、より包括的な支援が必要だと考えている。

遠藤：私は福島県富岡町で生まれ、高校まで富岡町で過ごし、大学進学を機に離れたが、東日本大震災の3年半前に福島に戻った。その間、20 数カ国の発展途上国で開発コンサルタントとして働き、様々な視点を得て帰郷したが、大震災が起きた。

大震災の前と後の福島県双葉郡の変化は大きく、この地域は他にない複雑な課題を抱えている。特に、自然災害と原発事故の複合災害を経験し、復興再生を進めるプロセスは世界で唯一のものである。だからこそ、この地域でしか学べないことがあり、この地域における課題解決の経験は将来の日本や世界に役立つと考えている。

福島復興には前例がないからこそ、先入観を捨て、この地域独自のチャレンジを進めることが重要だ。私はこの地で生まれ、世界を見てから福島に戻り、大震災を経験し、今後はこの地域の価値をさらに高めたいと強く感じている。

安東：人材育成について考えると、教育、特に子供への教育に目がいきがちだが、福島県浜通りの避難区域では、まず地域を育てることが重要だと思う。現在、人口が減少し、政府が移住者を呼び込む政策を取っているが、移住者の中には、子育てが困難で教育環境が整っていないという声が多い。これは、世界のトップレベルを目指す人材育成とはかけ離れていると感じる。地域のコミュニティが再生困難な状況で、新しい人が増え、地域が変わっていく。地域を育てることから始めないと、子供たちが成長しても戻ってくる場所がない。また、適切なポジションがないという問題が生じる可能性がある。福島復興では、子供やトップレベルの目標に偏りすぎているように感じる。

また、地元の人々についても触れるべきだ。戻ってきている方もいるが、戻っていない方が多い。戻っていない方も巻き込む形で地域に繋がりを持たせることが重要だ。避難している方々の中には、自分は戻れなくても何らかの形で繋がりを持ちたいという人も多い。そういった人々を地域に引き込むことで、復興の包容力が高まると思う。地域を育てる際には、新しい人を呼び込むだけでなく、戻れない方々もどうにかして地域に関わらせることが大切だと感じている。

山根：私は東京都八王子市出身で、この地域には縁がなかった。しかし、福島第一原発事故が私に大きな影響を与えた。原発事故を通じて、福島から東京へ電気が送られていたことを知らなかったこと

に気づき、社会に対する認識が変わった。原発事故後、自分がこの地域を壊したのではないかという疑問を抱き、その問いからこの地域に関わり続けている。

この地域に来てから、多くの学びがあり、経験の積み重ねだったと思う。観光に関わる理由も、地域のコミュニティの再生や文化形成に貢献したいという思いからである。現在、会社にはインド人スタッフが2人加わり、イギリスの旅行会社に営業をかけるなど、成果も上がっている。スタッフの2人も、インターンを通じて地域に愛着を持ち、会社コミットしてくれるようになった。教育とは勉強だけでなく、地域にどのように関わるかということも含まれると感じる。学びながら自分なりの価値を生み出すことが大切だと思っている。

鈴木: 今日の話では、福島復興政策の中でふたば未来学園が最も成功した事例として取り上げられ、オリンピックやインターハイといった光が当たっている部分だけではないという話をしたいと思っていた。しかし、安東さんや菅波さんから、まだまだ平均的な社会状況ではなく、光が当たらない部分が多いという話を聞き、自分の考えが物事の一部に過ぎないことを改めて感じた。

私はふたば未来学園高校の開校当初から関わっており、途中で2年間離れた。本校の開校経緯を考えると、地域や子どもたちが大きな傷を負っていたため、共有の場を作り、大震災で制限されていた学びや経験を提供しようとしたのだと思う。その点では成功していると思うが、経験を与えることに偏りすぎている部分もある。子どもたちがその経験を十分に消化し、自分の糧にしているのか、不安がある。また、普段のカリキュラムが過剰で、例えば今日のように学校で開催しているイベントに参加したいと思っても、普段の学習や疲れから、なかなか参加できない状況もある。そのため、教員目線で言うと、教育活動や授業内容を共有できるような学校作りが必要だと考えている。

小磯: 私もふたば未来学園高校で社会科を教えている。福島県は歴史的に東京に多くの人材を送り出してきた。戊辰戦争後、日清・日露戦争、満蒙開拓、戦後の集団就職、電力供給などで東京の発展に貢献してきた。しかし、そうした振る舞いも破綻し、学術研究も十分に育成できていない。日本は今、下り坂の時期にさしかかっている。経済成長や学術研究が盛んだった時代も終わりに近づいており、南海トラフ地震や首都直下型地震のリスクも高まっている。人口減少の中で、どのような教育が必要かが問われている。東京をみて人材育成をするのは限界があり、世界をみることも重要だが、グローバル教育が故郷を捨てる方向に向かっていないかという懸念もある。ふたば未来学園の探究活動は、自分の興味を広げ、地域の問題に取り組むことで、身近な世界を変える感触を得ることができる。これが地に足をつけた教育だと思っている。

野村: 話を聞いた上で、関係人口というテーマに非常に興味がある。大学時代に地方創生のインターンシップを経験し、地域を盛り上げるため、住むだけでなく、訪れる人を増やす方法を考えてきた。そのため、関係人口の形成や地域への関わり方についての話題は魅力的だと感じている。福島に地域に特化して話をするなら、震災、廃炉、復興といったテーマは教育の機会となり、人を呼び込む要素になり得る。教育や学びの繋がりで関係人口として関わりを持ち続けたいと考えている。

また、グローバル教育の話をする、自分の地域と他者を比較することで、自分の生まれた地域の良い点や悪い点が明確にみえてくる。地域に戻るかどうかはわからないが、関わり続けたいという思いが強くなり、そのような機会が増えることを願っている。

山根： 神田外語大学の石井さんと双葉郡で探求学習プログラムを作成し、渋谷幕張高校の生徒たちが1ヶ月間フィールドワークを行った。こうした経験から、学びを通じた関係人口の形成が重要であると感じている。関係人口に関して3点、述べたい。

1つは、学生たちとの交流を通じて私たちも多くを学べる点である。世代間の違いに触れることができる。2つ目は、オンラインプログラムで関わった学生が現地体験を望むようになり、関係人口が生まれることの意義を実感している。3つ目は、インド出身のスタッフが福島浜通りでのコミュニティ再生に関わりたいと選んで来た理由が、自分のアイデンティティの確認であり、地域づくりへの貢献が自分にとって意味があると感じている点である。これらの経験は、地域に人を教育しつつ関わりを深めるためのヒントとなる。

安東： 私は広島県出身で、福島県出身の夫と結婚して福島に来た。福島に来て、福島の人々が東京からの視線を強く意識していることに気づいた。原発事故で地域のアイデンティティが壊れ、個人のアイデンティティも影響を受けている。外部の視線に振り回され、風評被害の払拭ばかり気にしている印象がある。このような状況では、地域から外に出た人が自分のアイデンティティを確立することが難しくなる。地域のアイデンティティを再構築するためには、対話を重ねる場を作ることが重要だと考える。

森口： アイデンティティの話が出た。また、ふたば未来学園の長谷川さんが原子力の学びに興味があるが、どの大学に進むべきか悩んでいるという話があった。東京大学には原子力学科がなく、システム創生学科で原子力の一部を学んでいる。私は環境工学を専攻していたが、専門の名称が学生を引きつけないことがある。原子力という名前が敬遠されるため、アイデンティティに誇りが持てない状態は不幸だと思う。

私が所属する国立環境研究所では「働くことを誇りに思う」という姿勢を大切にしている。教育においても、地域を育てるための人材育成が必要だと考えている。未来学園で次世代育成に焦点を当て、大震災や原発事故を経た福島の浜通りでの教育について議論したい。

光と影について、影を知ることで光の意味が分かることもある。東京での華やかな教育とは異なり、ここでの経験が独自の価値を持ち、影をポジティブに転換する方法を議論できればと思っている。

崎田： 先ほど菅波さんの「誰も取り残さない学びの場」、安東さんの「地域づくりとコミュニティ再生」の話の伺い、これらが非常に重要な視点だと感じた。アイデンティティの話も含め、これらの要素が次世代や現在の大人たちに関連してくると思う。世代を問わず学べる場をどう作るかについても考える必要があると感じた。

また、私は地元の新宿で環境ネットワークを作り、学びの場を運営している。行政から指定管理を受けているため、計画的に講座を運営しなければならないが、NPO の職員だけでなく、地域の方々を巻き込んで企画することを重視している。課題解決能力を地域全体で育むことが大切だと考えている。福島だからこそできるアイデンティティを感じながらコミュニティ再生を進める場づくりについて話していただけると嬉しい。

井上：長谷川さんが原子力に興味を持っていると言ったが、原子力に関する専門知識は、機械工学や物理学などの基礎をしっかりと学ぶことで得られる。原子力工学科が少なくなっている現在、専門分野を深く学んでから原子力に進む方が、より充実した知識が得られるだろう。

また、若い人たちには世界を知ることが重要だと考えている。45 年ほど前、私が電力中央研究所にいた時に、外からの視点がいかに重要かを実感した。ヨーロッパの原子力研究所を見学し、日本の状況を客観的に理解することができた。長期間、外国の組織で経験を積むことは、日本を考える上で非常に有益だと思う。

さらに、日本では地方鉄道の廃止が進んでいるが、海外では田舎でも鉄道が運行されている例が多い。外に出ることで、日本の状況をより良く理解することができる。外での経験を通じて横の繋がりや人間関係を築くことも重要だ。それが将来、大いに役立つ知見をもたらす。若い人たちには、是非、海外経験を積んでほしいと思う。

林：人材育成について、ヒューマンリソースという言葉は、消費されるものではない。能力を身につけることが重要であると感じている。課題解決のためには、対話を通じて能力を最大限に発揮できる力を養うことが重要だと思う。人材育成ではなく、人間育成が大切だと考えている。その取り組みが福島再生塾の基金構想を通じてうまく活用されることを期待している。

竹原：この地域に住む者として、教育についてお話ししたい。国の支援はあるが、それが実際に地域の復興にどう影響しているかには疑問がある。支援があっても、人口が増えるかどうかは不明だ。ここに集まっている方々が地域復興を真剣に考えていることを感じている。特にふたば未来学園のようなグローバルな視点を持つ教育機関が重要であるし、その後の教育環境も大切だ。

現在、双葉郡の高校進学を選択肢が狭くなっているという問題があり、地域で学んだ子どもたちがここで成長する機会が必要だと感じている。外に出て行って戻らないのではなく、地域に根ざして成長してほしい。国はこの地域への支援をもっと強化すべきだと思う。

森口：林さんがヒューマンリソースと言った点について、リソースは消費財として見られがちだが、人的資本はストックとして捉えるべきだ。人的資本は消費されるものではなく、地域に根付き、次世代を生む基盤となる。企業が使い捨てのように扱う危険があるが、人的資本は長期的に残り続ける資本であり、教育機関がその育成に重要な役割を果たすべきだ。

山根：企業経営に関わる立場として、人を雇うことの難しさを実感している。企業の発展のために人を使うと、リソースとして扱ってしまうことがある。しかし、一方で地域の発展には企業の力や民間の力が重要であり、企業が新しいことを始める際には、人を単なるリソースとして扱うのではなく、次の世代を生むキャピタルとして育てていく必要があると考えている。

遠藤：世界から日本やこの地域を見つめることは非常に重要だと思う。私も富岡町に本社を置く企業を経営しており、最近、国際協力事業でインドネシアやペルーに行っている。そこでの経験から、日本が見落としている重要なことがあると気づくことがある。例えば、途上国の人々の豊かな表情や日本に戻った時の人々の元気のなさがそれに当たる。

富岡町は原発事故で6年間の空白があり、ゼロからの地域再建は他に類をみない経験だ。この地域には、今後何を加えれば豊かになるのかを考える機会があり、成熟した都市では得られない価値がある。コミュニティや自然資源、エネルギー問題などの多くの課題を追求できる場であり、地域の価値を見える化にすることが重要だと思う。この地域が日本にとっても重要な場所になる可能性があると感じている。

【グループ報告と討論】

司 会：穂積香奈（福島再生塾・副塾頭、株式会社ふたば・主任）

グループ 1：課題先進地域として福島に焦点を当てて話した。また、多様な世代について考える中で、地域特有の学びの重要性が強調され、地域特有の課題について話し合う対話の場が非常に重要であり、そこで双方向的な学びが得られるという意見が出た。学校教育の向上のような一方向的なアプローチではなく、対話を通じた深い学びが促進される必要がある。日常的に対話が生まれる環境を整えることが、地域における学びの深まりに繋がるとの結論に至った。

グループ 2：課題先進地域について、福島が本当にそう言えるのかを検討した。福島には特有の課題があるが、実際には日本全体に共通する課題が複合災害を通じて最も顕在化している地域ではないかという意見が出た。外からは福島が課題の多い地域とみられるが、地域内ではその課題がみえにくいという状況も話題になった。そこで、福島に関心を持って来る人々と地域住民が学び合う場を設けることで、福島や日本全体が抱える課題をより理解できるようになるという議論をした。

一方で、福島の若者が課題解決にプレッシャーを感じることがあり、学びや興味を重視しながら人材育成を進めるべきだという意見も出た。さらに、グローバル教育については、福島に関する英語の情報が少ないため、海外向けの情報発信や言語面での基盤整備が必要だと指摘された。最後に、国内外の研究者が集まり課題を共有できる場を作ることが重要だと考える。

グループ 3：課題先進地域の定義から議論を始め、福島を例に進めた。福島復興にはロールモデルが存在せず、型にはまらず本質を見抜いてチャレンジできる人材が必要だという結論に至った。背景には「福島復興は何を目指すべきか」という議論があり、「元に戻すべき」、「より発展すべきか」という意見

に分かれたが、私たちの班では、世界で有名になるより、その土地で人々が不自由なく暮らせることが理想的な復興だという意見が出た。

グループ 4: 4 班では、課題先進地域としての福島を対象とし、教育の対象を全年齢とした上で議論を進めた。「心の復興」、「人が集まらないこと」、「原発事故の教訓」という 3 つの課題が複合的に絡み合い、この地域のアイデンティティを形成しているという結論に至った。また、これらの課題が福島独自の魅力を生み、人々が集まり、新たな発見が生まれる場を作っていることも話された。こうした環境の中で生まれる教育は、課題先進地域における人材育成の一環となっているのではないかと思う。

グループ 5: 課題先進地域での人材育成については、2 つの重要な点が挙げられた。まず災害の経験を日本全国や海外にも広めることが必要だという意見が出た。特に災害が多い国々には、日本の防災技術や経験が役立つと考えられる。2 つ目は、世代や故郷を超えて学びあう場を広げていくことの重要性だ。異なる年齢層や背景を持つ人々が対話を通じて学びあうことが、日本の強みとされている。この活動を拡大し、観光業などでビジネスチャンスを生み出すことも提案された。

グループ 6: 課題先進地域について話を始めた。福島が日本全国や世界で起こりうる普遍的な問題を先に経験した地域だという結論に至った。具体的には、地震や人口減少、経済の縮小などの問題を先取りしている。一方で、福島には他の地域にはない特殊な問題もある。たとえば、原発事故の影響や急激な人口減少、特に、生活が厳しい地域や高齢者の割合が高い地域では、労働人口が極端に少ないという状況もある。

また、福島が国や東京から補助金を受けているため、他の地域と同じ解決策が通用しないことも指摘された。その上で、人材教育の目的について「生活力を養う教育」が重要だとの結論に至り、特に、優秀な高校に進学できない子供たちへの支援が必要だという意見があった。人口が少ないため、多様な高校を設立することは難しいものの、地域に根付く文化や協力的な雰囲気、企業家精神などを活用しながら、生き抜く力を育てる教育が必要だ。福島のような課題先進地域では、想定外の事態にも対応できるような生活力を持つことが重要であり、それが地域の人材教育の核になるのではないか。

グループ 7: 7 班では、福島が災害復興や少子化などの課題を先に経験していることから、それに対応する中で得た知識やノウハウが人材育成に繋がるという意見が出た。特に若い世代だけでなく、中高年層を含む幅広い世代が学べる新しい教育システムが必要だ。福島には地元で根ざした大学が少なく、若者の流出が進んでいるため、学びと働く環境を整えることが急務だという指摘もあった。

また、地域の技術力や先進性が活かされていない現状も課題だ。それを生かして人材育成や地域活性化に役立てるべきだ。さらに、生涯教育の重要性や福島が日本全体のモデルケースとなる可能性も議論された。

司会: 1 班から 7 班までの発表を聞いて、課題先進地域の定義について多様な理解がある中で、大学生や町外の方々がその定義に疑問を持っていることに気づいたため、意見を伺いたい。

山川：今日の議論で抜けているポイントは、エフレイ（F-REI）の教育に関するアプローチだと感じている。特にふたば未来学園が注目されているが、今後の焦点はエフレイにあると思う。エフレイの失敗の一因は、福島県浜通りの教育研究拠点が教育機関から研究機関にシフトしてしまったことにある。双葉地域には高等教育機関がなく、短大や専門学校も存在しない中で、大学院大学の設立構想が進められていたが、そのモデルは沖縄科学技術大学院大学（OIST）である。しかし、こうした大学院大学が高校とどう結びつくのか疑問がある。課題先進地域として教育研究に重点を置き、ここで学んだ知識を世界に発信することが重要と考えており、エフレイはどうあるべきかについて皆さんと議論を深めたい。

森口：エフレイについて初めての方もいる。私の参加した6班でも「エフレイって何ですか」と聞かれた。現在の名称は福島国際研究教育機構で、元々、復興庁が福島国際教育研究拠点として検討していたが、教育の部分が後退した状況にある。

現在、私は国立環境研究所に所属しているが、環境動態研究をエフレイに移管することが決まった。エフレイの幹部に「教育はどうなるのか」と質問したところ、はっきりした返答はなく、解決は難しい状況だ。研究を進めながら人材育成を通じて教育を発展させる方針のようである。しかし、ここで言われる教育は高等教育の中で世界トップレベルの研究を想定していると思うが、地域で本当に必要な教育とは異なるのではないかと考えている。エフレイに地域のニーズをしっかりと伝えることが重要である。国は地域からの要望に基づいて動くため、地域の要望を明確にしなければ状況は変わらない。

林：私は来年の4月からエフレイで環境動態研究を行う予定だ。エフレイが教育に対して後退した理由はわからないが、頻繁に地方自治体の首長を訪れて要望を聞いているようだ。エフレイの理事長もできる限りそれを反映したいと考えており、教育を重視するなら、地域からの具体的な要望が必要だと思う。エフレイは特殊法人としてゼロから設立されたため、わかりやすい成果を重視しているのかもしれない。その結果、教育は中長期的展望が求められるため難しい面があるが、浜通り地域の持続的発展に教育は不可欠だ。地域の方々には、教育の重要性について強く声を上げて欲しいと思う。

竹原：私たちの要望が聞かれていないように感じるが、最近、エフレイの職員が交代し、エフレイの人が町長に挨拶に来た。私たちはエフレイが世界の知識を活用して地域の発展に貢献することを望んでいる。この地域に公立大学や国立大学の設立が求められている。私たちは「この地域で何をやりたいのか」をまず考えるべきと提案した。長期的視点が必要だが、「ユニバーシティでなくて、カレッジで良い」とも考えている。ふたば未来学園や小高産業技術高校の次のステップとなる実習や学びの機会を提供できる大学が必要だ。こうした高等教育機関の設立が重要だと話したが、結局、エフレイからは「長期的に考える」との返答であった。今後も地域の声を結集し、力を合わせていきたいと思う。

司会：人材育成を考える上で、エフレイとの関わりが重要なキーワードであり、防災や生涯学習、大人の学び直し、生活力、地域特有のニーズや高等学校、大学を含む学びの場、型にはまらないアプローチがキーワードとして浮かび上がった。そして、テーマ2「地に足のついたグローバル教育」に移りたいと思う。

グループ 1: 分野横断的な段階的学びの場が重要だという意見が出た。特に海外からの関心が原発事故に集中しており、特にふたば未来学園の高校生は原発事故の記憶の継承に取り組んでいる。海外の方に原発の問題を語る際、単一のテーマではなく、福祉や福島を学びながら幅広く発信する仕組みが必要だ。高校生には実践の場が求められ、発信や交流、留学といった学びの選択肢が段階的に整備されることで、地に足のついたグローバル教育が実現できるのではないかと意見が出た。

グループ 2: 1 つ目と 2 つ目のトピックは同じ延長線上にある。1 つ目では、福島地域の人々が特有の課題や日本の普遍的な課題を把握しづらい状況に触れた。福島復興が終わっていない中で、外部との接点が重要であると考えている。グローバルに開かれた教育は、日本以外の人々とどうつながるかを考える必要がある。地に足のついたグローバル教育では、新しいことを始めるのではなく、今あるものを生かすことも重要だ。具体的には、留学生がいるグループ内で、日本語と英語で得られる福島の情報の質が異なるため、地域の人々との交流の場を作る必要があるという意見が出た。

グループ 3: 私たちの班では、相互的な関係を築くことが重要だという議論があった。単に一方が与えたり、受け取ったりするだけではなく、お互いに学び合うことが大切だと考えた。

グループ 4: 4 班は、国際的な人や物が集まる場を作り、他者との比較を通じて自己の確立を図ることが重要と考えた。議論の冒頭では、「グローバル教育とは何か」という前提があり、国際的要素と自己を比較することで自己確立を行うと認識された。現在の教育が「地に足がついていない」との意見があり、その理由は主に 2 点だ。1 点目は、学んだことを還元する環境や自主的に学びを深める機会が不足していること。地域に高等教育機関がないことがこの問題を引き起こしている。2 点目は、目的と手段が逆転している教育が多いこと。英語を学ぶことが手段ではなく目的になり、効率的な学習が得られない原因となっている。

グループ 5: 1 つ目の環境について、グローバルな視点で言語が重要だ。言語は手段であり、学校で英語の授業を増やしても使う場面がなければ身につかない。昨年のドイツ人アーティストを招いたプロジェクトのように、実際に言語を使う機会があると、教科書で学んだ例文を試すことができる。こうした環境を整えることが大事で、それが次の理解につながる。

2 つ目は、自分たちの文化を教えたり、相手の文化を学んだりする機会が生まれることだ。遠藤さんが成田空港に帰った時に感じた日本社会の問題点も異文化理解に関係している。現場に行くことで、埼玉県から福島県に来た私が新しい考えを学ぶように、互いの文化を客観的にみることができる。このように、環境と理解の 2 点が重要だと話しあった。

グループ 6: グローバル教育について、地域の人々からは実際に行われているのかという疑問が呈され、むしろ生活や生きる力の方が大事だという意見があった。しかし、グローバル・リベラルアーツでは、グローバルがインターナショナルとは異なり、同じ地球に住むつながりを強調する定義が紹介された。地域の子どもたちが外の世界を見たいと思うのは自然だが、地域の一員として外に出ることが重要だと

された。地域の文化やお祭り、地元の企業に触れ合い、幼少期から地域での生活をしっかり体験することが大切だ。それによって、外部に出た後も戻りたいと思う人が増えるというサイクルを作る必要がある。

また、東京から来た人は、原発事故を間近で体験することで、理論と生活のつながりを実感する機会となる。地域と外部のつながりが強調され、グローバル教育は地に足をつけたものとして見直されるべきだと話しあった。

グループ 7: 7 班では、「地に足のついたグローバル教育」については結論が出なかったが、いくつかの意見があった。福島の問題は世界の問題でもあるため、こうした事例を考えることがグローバル教育に該当するという考えがあった。一方で、日本で海外のゲストスピーカーを招くだけでは不十分だという意見もあり、福島でのフィールドワークで得た知識を自分の地域で活用することが地に足のついた教育とされた。また、留学生についても、ホームステイなどを通じて実際の地域の文化や生活を学ぶことが重要だとされ、グローバル教育は情報の受け取りに留まらず、実践的な経験を通じて地域に還元することが求められるとの意見があった。

司会: 7 班からの報告を受けて、2 つのキーワードが浮かび上がったように思う。一つ目は、には横断的なやりとりや外との接点の必要性であり、これにより広い視野を持った教育が可能になるという点である。2 つ目は、地域で知識を活用するための場の必要性で、エフレイや高等教育機関が重要であるという意見があった。高等教育機関があれば、地域の人々がグローバルな視点を学び、地域に還元する機会が増えると期待される。

遠藤: 私自身、富岡町で生まれ育ち、東日本大震災で故郷を追われた経験がある。現在、移住者が新しいコミュニティを形成することに喜びを感じる一方で、震災前の人口 1 万 6000 人が今は 2400 人に減少した現実に複雑な思いを抱いている。

大震災前に福島第二原発の建設を見ていた私にとって、地域の基幹産業が急に失われたことは大きなショックだった。この地域には多くの課題が残されており、地域社会の再構築が重要だ。森林管理や農地活用などに責任を持ち、次世代に教訓を残すことが求められている。

日本全体の社会課題を考えると、震災の教訓を生かし、福島復興を少しでも早めるための「教科書」を作る必要があると感じる。福島は日本がどのようなリーダーシップを取るべきかを考える上でも重要な場所であり、特にエネルギーと食の問題について、福島の地域から学び、世界とつながる方法を考えるべきだ。

小松: 今日、世代や地域を超えた対話の重要性を再認識した。特にインドネシアの方との交流は貴重な体験であり、地域ならではの魅力として挑戦できる環境や学び直しの方が存在し、地域の良さを活かしていきたいと感じた一方、日本全体がグローバル化の中で、福島の地域住民が外国人と交流する機会が少ない現実もある。しかし、意識的にその環境を作り出すことで、地域のグローバル化を促進できるの

ではないかと思っている。地方行政としては、できることには限りがあるが、地域の方々と対話を重ねるながら環境整備を進め、地域づくりやまちづくりのアイデアをいただきながら、その実現に向けて取り組んでいきたい。

以上